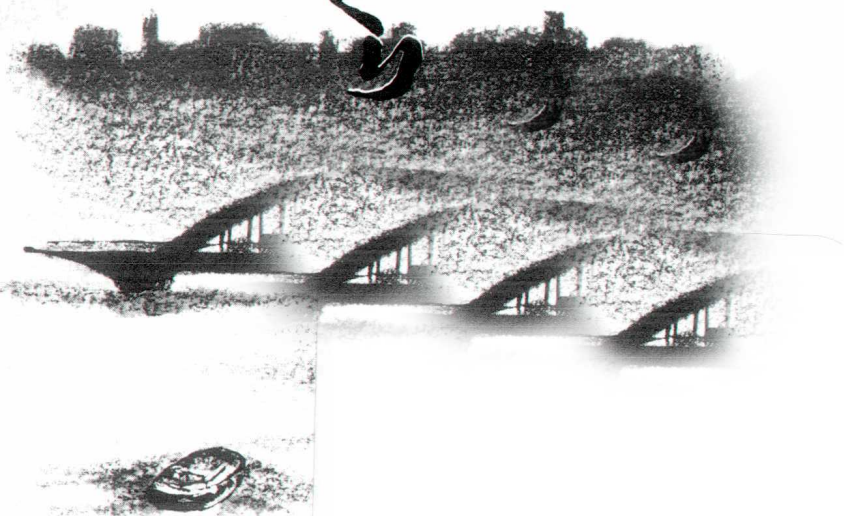


高橋正樹

姉さんは腕まくり



高橋正因
姉さんは腕まくり



検印廃止

姉さんは腕まくり 八五〇円

昭和五十五年六月五日 第一刷

著 者 高 橋 正 昭

発行者 藤根井和夫

印刷 株式会社 有 堂

製本 株式会社 明 泉 堂

発行所 日本放送出版協会

東京都渋谷区宇田川町四一〇
郵便番号一五〇

(落丁本・乱丁本はお取替いたします)

目次

春風と陣痛	5
少年	28
弥生の日々	53
母もどき	73
イタリア賞	98
ぼくの失態	126
下駄先生	151
留学	172
イタリアより愛をこめて	

NHK銀河テレビ小説

「姉さんは腕まくり」主題歌

ぼくの街よ おはよう

作詞 上條 恒彦

朝焼け ひろがる空を
北へ帰る 鳥たちよ
春はいつも こんなふうに
やわらかに 訪れるよ
いつか ぼくの胸の中に
ひろがってゆく 熱いおもい
飛びたつ鳥の ぬれた翼^{つばさ}
大空 駆けてゆく
目ざめ早い 路地裏の
耳になじんだ あしおと
今日はどんな 風をはこぶ
ぼくの街よ おはよう

©1980 by Japan Broadcast Publishing Co., Ltd. All rights reserved

姉さんは腕まくり

春風と陣痛



ぼくは布団のなかで頬杖をついてぼんやり窓の外を眺めている。

春三月、下町には珍しく晴れ渡った青空を羊のような雲がゆっくりと流れてゆく。

隅田川を遡る^{まがほ}ポンポン蒸気のリズミカルな音、小鳥のさえずり、竹桿屋の売り声、すべてが耳にこちよく響いてくる。そして父さんの焼くせんべいのかぐわしい匂い——のどかである。とたんに台所で母さんが鍋を落したりするけれど、ぼくはまったく気にならない。こんなおだやかな気分になったのは久しぶりだと思う。

昨日までの受験生生活が夢のようだ。毎晩襲ってくる睡魔との闘いは、悪魔を相手どったエクスシストのようなもの。眼ざまし時計の音にさえ苛だち、人間はどうして眠らなければいけないのかと思ったりしたものだが、今はコチコチという響きが心を休める音楽のように聞こえ、

人間はどうして起きなければいけないのかと思っている。

大学は二つ受けた。私立の方は明日発表になる。不安はあるが割といけたような手ごたえを感じている。問題は本命の国立だ。共通一次の結果からすると少々冒険だとは思ったけど、こは一番、男は度胸と一念発起、東京商船大学を受験したのである。

商船大は隅田川を少し下った江東区の越中島にあって、家からそう遠くもないから、父さんはぼくが三つ四つの頃からよく散歩に連れてってくれたものだ。川べりにある練習用の帆船は子供心を十分にかきたてるほどカッコいい。そんな幼児体験が原因で商船大は憧れの的だったが、答案用紙の裏にそんな思いをてんめんと綴ったところで入学させてくれる訳がない。あくまで答案用紙は表が肝心なのだ。

しかし、もし不幸にして二つともすべった場合、わが家の連中の反応を考えると気が重くなってくる。

父さんはふだんから口が重いから、黙ってほっといてくれるだろうが、心配症の母さんはそうはいかない。すぐぼくが自殺でもするんじゃないかと考えるだろう。考えるだけなら構いやしないが、思いつくだけの慰めの言葉を使って、ぼくをうんざりさせるだろうことは今から眼に見えている。しかし、それも三日ぐらいおとなしく聞いていれば遠のくから我慢もできる。

問題なのはもう一人、口数がきわめて多く、とくに悪口にかけては天才的といっているひらめきをみせる女の存在だ。

「あの程度の試験勉強で受かると思ってたのかい。お前は世の中をナメてるんだよ……浪人する？ 一年二年浪人したところで受かると思ったら大間違いだよ。脳みその目方が標準以下なんだからね」

と、まアこういった内容を次から次へと思いついて一年間言い続けるのが、わが家の長女、愛子姉さんだ。

姉さんの悪口には十八年間つきあってきた実績がある。この程度では別段腹もたたないが、それを嬉しそうに言うところがなんともいまいましい。

友達の家庭をみても、映画や小説なんかでも、長女には長女らしさってのがあると思うんだけど。つまり、長女というのはおっとりとして、家庭的で、いざというとき頼りがいがあって、その上、弟想いである——そんな素敵なイメージなんだ。

でも、あらゆる法則に例外があるように、わが家の長女にはそんな長女らしさがもののみごとくに欠落している。

おっとりしてるのは眠ってるときだけだろう。それも歯ぎしりをしない場合に限られる。家庭でないようにみえるのは、ほんとに家庭的じゃないからで、しょっちゅう母さんと衝突の原因になる。いざという時頼りにならないどころか邪魔になる人物だ。弟想いに関してはもう何をか言わんやである。月々小遣いをくれるのは感心だが、その分だけこき使われるからね。どうも弟というより使用人と思ってる節がある。

おそらく両親は愛らしい子になるようにと願いをこめてつけた名前だろうが、その願いは神様まで届かなかったに違いない。

ま、姉さんの名譽のためにつけ加えれば、取り得は下町っ子らしくカラッとして明るいとこそだろう。

電灯じゃあるまいし、明るいからいいってもんでもないと思うのだが、世の中には物好きな人間もいて、そんな姉さんに「この世に二人とない女性」とぞっこん惚れ込んだのが現在の亭主、台五郎先生である。

職業が中学の美術教師というのに、なんで姉さんごときに美を感じるのか。ぼくは台先生の美的センスを今だに信用しきれないでいる。

どことなく浮世ばなれしたところのある台先生と姉さんでは、おそらく一年もたないんじゃないかという周囲の予想を完全にくつがえして、早や三回目の結婚記念日に向かっている。

その上、待ちに待った赤ん坊が今まさに生まれんとしているのである。そういえば今日は予定日のはずだ。

そんなことを考えていると、とたんに階下から姉さんの声が聞こえてきた。

「あゝ、重たいよう。どうして女だけがこんな目に会わなきゃいけないんだろ。どっこいしょと」

「どうだい、具合」

これは隣の食堂の主人、源さんの声だ。多分父さんと将棋でもさしてゐるんだろう。

「そろそろじゃないかな、今日は予定日だからね」

「動くかい」

「動く動く、この間なんか抱いてた猫を蹴落したんだよ」

「へえ、猫をね。男だったらサッカーの選手だな」

「女だったらラインドダンスの踊り子がいいんじゃない」

相変らずくだらない冗談を言っている。

ぼくが茶の間に降りてゆくと、予想どおり源さんと父さんが将棋盤をはさんで向かい合い、めいっばいはちぎれて北の湖の少女時代といった感じの姉さんが、座椅子にもたれてふんぞり返っている。

「栄一、大学どうした」

姉さんの第一声に、ぼくはおやと思う。さすがに姉らしく、ぼくのことを気にしてくれたのかと見直したりする。だから、

「私立の発表が明日なんだ」と言うと、

「どうせ駄目だよ。今からあきらめてた方が傷は浅くてすむよ」

こうだ。だからぼくはちょっとムキになって言い返す。

「ふん、結果を見てから言っってほしいね」

「へえ、お前自信あるの」

「まあな、本命は国立だけど」

「国立って、どこ」

「ヘッヘッへ、どこでしょう」

実は姉さんには知らせてないんだ。商船大なんて言ったらたちまち「お前、気がふれたんじゃないかい。泳げるからって商船大には入れないんだよ」なんて言うに決まってる。だから今までそういう追求には、大臣の国会答弁を見習ってウヤマヤな答え方をしてきたのだ。勿論、父さんと母さんには厳重に口止めをしてある。

「そうか、いよいよこの町内から学士様がでるって訳だ」

この源さんも困った人だ。受験しただけでもう入ると思いい込んでいる。根っからの楽天家なんだろうな、あまり深く考えないタイプだから疑ったり迷ったりすることがない。考えようによつては羨ましい性格である。

そこへ母さんが帰ってきて、姉さんの姿を見るとあからさまに嫌な顔をする。

「お前、また来てんのかい。たまにアパートで落ち着いてたらどうなの。でっかいお腹で毎日そこに坐ってられたんじゃないよ」

「今日は特別。だって予定日なんだから、いつ陣痛がはじまるかわかんないでしょ」

「予定日だから生まれるとは限らないんだよ」

「わかってますよ。でもさ、いちがいに陣痛って言うけど、どれくらい痛いのかは人によってまちまちなんでしょ。指でつねる程度の人もいれば、ヤットコでギュッとやるぐらい凄く痛む人だっているわけでしょ。私、痛いの弱いからね。もしヤットコの方だったらムムムなんて気が失っちゃうよ。もしアパートでそうだったらどうすんの、母さん。その点この家にいれば誰かが気づいて、愛子しっかりしな、気をたしかにもつんだよ、なんて言いながら病院まで運んでくれるからね。ね源さん」

さっきから口をあけて発言の機会を待っていた源さんが姉さんを支持する。

「そらそうさ。初子なんだから愛子ちゃん不安なんだよ。生まれるまでずっとこの家にいた方がいい。うん、それがいい」

いつもなら母さんは迫力をもって言い返すところだが、今日はホッと溜息をつくだけだ。しかしその溜息にはいろんな意味がこもっていることがぼくにはよくわかる——お前はいい年をしていつまで甘ったれたことを言ってるんだい。言いたい小言は十や二十じゃないんだけど、余計な刺激を与えちゃいけないと思って、少々我ままは目に見てやってるんだからね。ほんとにお前には腹がたつねえ——と、まアそういう思いのこもった溜息なのだ。

思い返せばこの十ヶ月、ぼくらはどれほど姉さんのために無駄な時間を使わされたろう。

流産かもしれないと母さんを慌てさせたのは二度や三度のことじゃない。あるときは妊娠中毒症かもしれない、またあるときは子宮外妊娠のような気がする、そしてまたあるときは奇形

児だったらどうしよう、心臓病、血圧異常、腎臓病と、よくまア考えつくと思うほどの症状をもちこんできて、わが家をゆさぶってくれたものだ。

その実、姉さんは健康そのもので、ツワリさえないんだからね。むくみもめまいも何ひとつ起こらない。あんまり健康すぎてかえって気まりが悪い。せめてひとつぐらい何らかの自覚症状を体験したいというせつない願望から、ちょっと疑わしい症状があるとすぐさま報告に来たんだそうだが、報告を受ける方はたまったもんじゃない。

そんな健康状態だから、勤め先の会計事務所から貰った産休はほとんどあくびに費し、おしめや産着の製作は母さんと次女の知子姉さんまかせ。それがまた母さんともめる原因なんだが、母さんも作ってやるからいけないのさ。放つときや姉さんだってやらざるを得なくなると思うんだけどな。親ばなれしない娘と娘ばなれしない母親、どっちもどっちだよ。

そうかと思うと突然思いついたように育児の本などを買ってきて、さすがにと思わせたりするんだが、目次を開いたまま眠りこけてる姿は、とても他人にみせられる姿じゃない。おまけに夢をみて笑ったりしてるんだから、ほんとにこの人が母親になれるんだろうかと、ぼくは今強い不安を感じている。

それにひきかえ台先生の勉強ぶりは眼をみはるばかりであった。妊娠婦の正しい歩き方、坐り方をはじめ、おなかが張るときのマッサージ法、腰が張るときの圧迫法、栄養のバランス、更には腹式深呼吸、いきみ方に到るまでことごとくマスターし、今や赤ん坊の泣き声のレ

コードを買ってきて、泣き声で欲求を聞きわけける学習に進んでいる。驚くべき熱意である。なんとか都合をつけて台先生に出産して貰いたいくらいである。

台先生のそんな異常なまでの熱意は、姉さんの高年齢出産に対する心配から出たものだろうだ。

「統計によれば三十歳以上の出産には三十パーセントぐらい手術分娩になる可能性があるそうです。ま、手術分娩といってもほとんど心配はないそうですが、少しでも愛子の不安を取り除いてやろうと思って、いろいろと本を読んで、そのついでに腹式呼吸からいきみ方までマスターした次第です」

先日、台先生はそう言って母さんをいたく感動させていたが、なにもそこまでやることはないじゃないかという気もするけどね。

噂によれば、行きつけのスナック「リンデンバウム」でも「出産に較べれば芸術など足もとにも及ばない。なにしろ人間そのものを創造するんだから」——と、常連客にまで腹式呼吸の講義をやっているそうで、店のマスターは批判的だ。つまり、いくら足もとにも及ばなくとも台先生には芸術の方をやって貰いたい。腹式呼吸を研究していきんでみたところでどうなるものでもないだろう、というのが批判の理由である。

案の定、いきみすぎてパンツを汚したりしてゐるんだから。いやはや。

ま、いくら高年齢出産の三十パーセントが手術分娩になるとしても、七十パーセントは自然

に生まれるならば、姉さんは間違いなく七十パーセントの方だと思うね。三十パーセントに入るほどエリートではない。

その夕方のことである。

一日中、わが家の茶の間でふんぞり返っていた姉さんも、ピクリともしないおなかの様子に、さすがに今日は生まれそうもないと思ったんだろう。

「あゝあゝ、今日是不発ですかね……ね、赤ちゃん、早くでてきなさいよ。そこにはカレンダーがないからわからないでしょうけど、今日は予定日なんですよ」
などと、とぼけたことを言いながら帰りかけたたん、

「あれ」

と、一瞬変な顔をしておなかをおさえた。

「どうしたんだい」

母さんが声をかけると、姉さんはいつになく緊張した様子で、

「なんだか珍しい感じ……」などと言ってるうちに「痛タタ、痛タタ……」と、おなかをおさえてかがみこんでしまったのだから、驚いたのなんの。

「愛子、どうした、痛むのかい」

「母さん、いよいよ来たみたいだね」